

組織的にすすめる学校保健活動について
～連携と児童の主体性を高める取組を通して～

呉市立横路小学校 養護教諭 木村千恵

1 はじめに

本校は、呉市の中心部より東に位置し、校区内には大学や総合病院があり、呉市内で人口が増加傾向の地域にある。学校教育目標を「自分を育て 道を拓く～主体的に行動し、ともに高まり力を尽くす児童の育成～」とし、呉市が推進する小中一貫教育の取組を進めている。横路中学校区は一小一中で構成され、施設は隣接しており、授業の乗り入れ指導や合同研修などが行われている。

2 本校の実態

本年度の児童数は797名、27学級の大規模校で、養護教諭は複数配置である。児童は明るく素直で、全体的に落ち着いて学習に取り組むことができている。

保健室来室は、1日平均26件であり、その内訳は主に救急処置で、けがの対応が多い。また、メンタルヘルスや発達に課題のある児童の増加や、食物アレルギーや感染症への対応など、取り組むべき健康課題は多岐にわたっている。

全58名の学校職員が協力して、多くの健康課題の解決に取り組むためには、学校長を中心とした学校経営の中で、校内外を含め綿密な連携を図ることが重要であると考えている。また、児童の主体的な活動を促進して活力ある学校保健活動にしていきたいと考え、いつでも誰でも利用しやすい保健室を目指している。

3 連携を意識した取組の実際

(1) 教職員

ア 教職員向け保健室利用ガイド

学校保健活動の効率と保健室の利便性を高めるために、マニュアルが必要であると考えた。保健室利用時の注意点、救急対応や健康観察の概要、学校保健事務の手続きや各健康診断の仕様などをまとめ、小冊子にして年度初めに教職員に配付し、研修を行うことで、学校保健活動への理解と協力が促進された。

イ 連絡票等の活用

保護者と学校、保健室と学級担任などの情報の伝達と連携を、適切かつ効率的に行うため、連絡票やカードを作成し活用している。欠席連絡票とインフルエンザ等感染症による欠席連絡票を色分けすることで、教職員の意識が高まり、感染症流行への注意喚起につながった。また、これらの情報を活用して、健康診断を円滑に進めたり、児童への個別の保健指導をしたりすることにも役立っている。

ウ 教育相談に関わる校内連携

児童の出欠席や遅刻の状況について、毎日丁寧に把握し、健康管理ソフトを用いてまとめている。さらに、健康診断や来室状況など児童の様子を加え、生徒指導部や管理職へ細かく情報提供している。不登校傾向であったり遅刻が増えてきたりするなどの情報は、生徒指導主事が計画運営して実施する校内研修会で活用され、全教職員で児童の写真を見ながら、それぞれの支援の内容や役割分担を確認し、組織として

対応している。また、必要に応じて特別支援教育コーディネーターが中心となって、個別のケース会議を開催している。担任、専科教諭、養護教諭、管理職などが集まり、支援の方法を検討し、児童に合わせた対応をしている。

エ 栄養教諭と連携して行う指導

日頃から、栄養教諭が企画運営する食物アレルギーの給食対応に関する専門委員会に毎月参加したり、教職員対象の食育研修に協力して運営したりすることで、栄養教諭と連携をしている。特に、学期末の個人懇談会の機会に、保護者を対象とした個別の健康相談会を栄養教諭、養護教諭が協働して、実施している。偏食や朝食欠食などの課題について相談のある保護者に対し、栄養教諭は実物展示を活用しながら、栄養の面からの相談を行い、養護教諭は、睡眠や運動など生活リズムの状態を聞いたり、成長曲線などの健康診断結果からともに考えたりしている。

(2) 中学校や地域

毎年9月には「早寝早起き朝ごはんキャンペーン」として、基本的な生活習慣の定着に取り組んでいる。小学校と中学校で生活リズムカードの項目を揃えたり、児童がオリジナルキャラクター「よころっこロン」に扮し早寝早起き朝ごはんを呼びかけたりした。



中学校で呼びかけるよころっこロン

また、分掌の教職員が中心となって作成した食育ドラマを、オンライン全校朝会において上映した。さらに、その食育ドラマを、中学校での指導に活用してもらい、地域の民生委員へも公開し、地域にも広げた。

(3) 学校医、学校歯科医、学校薬剤師や外部専門機関

学校保健委員会を通して、感染症への対応、体力低下などの課題について、学校と保護者で協議し、助言を得ている。また、児童、保護者、教職員のニーズに応じて、積極的にスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーにつないでいる。場合によっては、医療機関とのカンファレンスに参加したり、呉市や福祉施設と連携を図ったりしている。また、その場で得た情報を校内連携会議につなぎ、チームとして、継続的で丁寧な児童保護者対応に努めている。

4 児童の主体性を高める取組

(1) 主体的に学校保健活動に参加する場

第6学年の児童がボランティア活動として、手洗い場での距離を保つためのポイント貼りや手すりなどの消毒作業ができるような場を設定し、現在は、児童が毎日自主的に続けている。高学年の姿を見て、低学年も、石けんや消毒液の補充などを積極的にできる児童が増加した。

また夏には、運動場や集中下足からよく見えるところに、環境省の熱中症予防サイトから得た呉市の暑さ指数を掲示することで、児童は、給水や休養などを意識して、行動選択ができるようになった。



今日の暑さ指数の掲示

学校保健活動や児童の様子は、積極的に保健だよりに写真を添えて掲載して、保護者の理解と協力を得るようにしている。

(2) シンプルでわかりやすい環境づくり

保健室の約束や時程の掲示をすることで保健室でのルールを分かりやすく示した。それと同時に、短時間でも、気分の切り替えができるような工夫をし、児童にとって居心地が良いと感じられるよう、壁面の小さ

なスペースを利用した「ギャラリーほけんしつ」には、児童や先生が描いた小さなイラスト作品を掲示している。

健康診断では、限られた時間の中で、整然と実施するための手立てとして、検診の方法や注意点を示したカードを作成し、事前に教室で担任から説明するようにした。また、保健室内では「まつ」「診察」などの足形や矢印を置いたり、待機場所をテープで示したりした。一目見てわかるように、シンプルな表示をすることで児童が安心して動けるようにしている。

(3) 自己理解と表現のための視覚支援

体調不良を訴えて来室した児童に対し、問診の中で、痛みを点数化したり、言語化したりすることを促すツールとして「いたみのものさし」を利用している。また、心が混乱して困っている児童と話をするときには、表情カードやホワイトボードなどを活用し、気持ちや出来事を、絵や言葉で可視化するようにしている。

また問診の際には、自分の生活の振り返りを助ける「問診カード」や、けがをしたときの姿勢や状況を表現させるための「手足が動く人形カード」などを活用している。自分を客観的に見ることで、体調不良やけがの原因を探り、その後の生活に役立てるようにしている。

残り時間が一目でわかるタイマーは、保健室で休養したりクールダウンしたりする時間を区切るために、よく活用している。児童の自己理解と意志決定の力を高めるために、状況に応じて、自分の考えや思いを言葉で表現させ、休養する時間を自分で選択させるようにしている。

5 新型コロナウイルス感染症拡大防止対策

(1) 令和2年度の実施

ア 学校医、学校薬剤師、中学校との連携

健康観察や手洗い、消毒の方法について、学校医、学校薬剤師から助言を受けて対応した。また、中学校と連携し、健康観察カードや消毒方法などについて共通認識を図った。

イ 「おはよう手洗い」

学校医から、登校時の手洗いを徹底するように指導を受けた。そこでまず、手洗い場にあった固形石けんに加え、泡ハンドソープを設置し、「おはよう手洗い」と名付け、校門から入ってすぐの中庭にある4か所の流しにおいて、手洗いを実施することにした。毎朝、養護教諭が挨拶をしながら手洗いを呼び掛けることで、児童は、正しい手洗いの方法を習得したり、清潔なハンカチで拭く習慣がたりし、児童の意欲と手洗いの効果を高めることができた。

ウ もくもく給食

給食場面の感染防止対策として、「もくもく給食」を実施している。給食前の手洗いの後は何も触らないこと、配膳後の量の調整は、児童に黙って手を上げさせ学級担任が行うこと、「いただきます」をしてからマスクを外し、食事中はしゃべらないこと、密を避けるため、食器運搬時刻をずらすことなどの対策を徹底した。

エ 児童保健委員会の活動

保健委員会の児童が主体的に、校内放送で手洗いの徹底を呼び掛けた。給食前には、手洗いの歌を放送した。また、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のために、「コロナ予防標語」を募集するなどの啓発活



「おはよう手洗い」の様子

動を行った。

(2) 令和3年度の取組

令和5年春の完成を目指し、本館校舎の建替え工事が始まった為、中庭が使えなくなり蛇口の数が減るなど、環境が変わり、前年度と同様の感染対策の実施が難しくなったが、新型コロナウイルスの感染状況に応じた予防策を継続している。

ア 季節に応じた予防対策

令和3年度の夏は、感染リスクの高い状態での熱中症対策が必要であった。暑さ指数に応じて教育活動や生活を調整する熱中症対策と感染予防について、企画委員会で協議して昨年度よりさらに強化した。表や図でわかりやすく表した対応カードを各教室に掲示するとともに、全校朝会で保健指導「よころっこの新しい生活様式、夏バージョン」を実施した。毎日の暑さ指数を保健委員会児童が校内放送し、暑さ対策と感染症予防を呼びかけた。



暑さ指数対応カード

イ 感染状況に応じた予防対策

予防対策は、「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル」と教育委員会からの指導の下に行っている。感染状況により示されるレベルに応じて行う感染予防対策について、校内の細かい対応については、企画委員会などの場で協議して学校長の判断のもと、対応策を適宜変更し、徹底している。

感染症レベル3の状態が2学期が開始されることとなり、教職員の不安が高まった。そこで、対策会議を開き、まず学年団で、マスクを外すタイミングや欠席者への対応など具体的で細かい疑問や課題を出し合った。それを分掌でとりまとめて、管理職と協議して学校全体の予防対策を決定し、共通理解を図り徹底した。

ウ 児童保健委員会の活動

保健委員会の児童は、「コロナを予防して、よころっこが毎日健康に過ごせるようにしよう」という目標にむけて、手洗い場の石けんの補充や、換気やマスク着用についての呼びかけ放送を毎日続け、主体的に活動している。

また、自分たちができる4つのコロナ予防策を呼びかけるコマーシャル動画を作成し、オンライン全校朝会で上映した。その様子は、保健だよりを通して、保護者に発信をした。

児童からの発信により、主体的にみんなで対策をしようとする意識の向上につながり、さっそく手洗いを念入りにしようという児童の姿も多く見られた。

エ ICTを活用した保健指導等の継続

令和2年度から、儀式や全校朝会、運動会や発表会などは、オンライン会議ツール（ZOOM）やGoogleclassroomを活用し、教室や家庭をつないで実施した。学校薬剤師による薬物乱用教室や、ゲストティーチャーを招聘したがん教育なども、オンラインで行った。また、第4学年を対象とした歯科保健指導は、クラウド型授業支援アプリ（ロイロノート）を活用して実施した。むし歯や歯肉炎の原因である歯垢を歯みがきで取り除くことを習得させることを目指して、ロイロノートを使ってスライド資料を作成し、教室のテレビで映しながら学習を展開した。健康な歯肉と歯肉炎を比較させるためにそれぞれの画像を各自のタブレットに配信して、それらの違いを書き込んだ後に、発表させるようにした。さらに、従来実施していたブラッシングなどの指導は、感染予防の観点から実施が難しいため、家庭での学習とし、自分の歯肉の状態を鏡で確認して、今後の歯みがきへの意欲を記入する宿題のカードを各自のタブレットに送った。ロイロノート

の中で宿題カードを提出させ、養護教諭が確認して返却した。

6 まとめ

学校保健活動を効果的に行うために、保健管理と保健教育をすすめてきた。これらに関する情報やルールをわかりやすく示すことで組織の意識統一を図ることができ、連携を重ねていくことで、教職員一人一人が主体的に学校保健を推進することにつながった。さらに、保護者や外部機関と積極的に連携することで、学校保健活動への理解を得ることができた。また、児童に対しても、主体性を高めることを意図した働きかけにより、お互いの健康を守ろうと行動する児童の姿が多く見られるようになった。

これらの活動を通して、学校全体で学校保健活動を推進するという気運が高まり、感染症対策においても、状況に応じた取組を継続することができた。

今後は、学校保健活動に関する評価指標や他者評価など適切な評価に関して研修を深め、PDCAサイクルに沿って、成果と課題を明確にして、学校保健計画をさらに改善していきたい。

7 おわりに

連携というキーワードで整理することで、改めて、学校保健活動は多様な立場の人とのつながりの中で運営されていることを実感した。身体的距離の適正確保が求められるコロナ禍において、さらに、できることを模索しながら、人とのつながりを大切にしていきたい。